2020年 秋号　男女が共に生きる情報紙 VOL.126

- いまだから観たい！「ドリーム」
- 男女共同参画社会を支える地域における共同参画の重要性
- コロナ禍後の日常の暮らし方
- 読書の秋に、多様性について考えてみる
- インフォメーション
- 編集後記

かがやけ地球

藤沢市

映画紹介

＼ いまだから観たい！ ／

「ドリーム」

キャサリンは忍耐強い。使うことを許されたトイレが800m離れた建物にしかなくても、必要な資料のほとんどが黒く塗りつぶされていても、職場のコーヒーが自分の分だけ別にされても、ただひたすらに目の前の仕事に取り組む。確実に結果を出す。「数字は信用できる」と言う。

DREAM

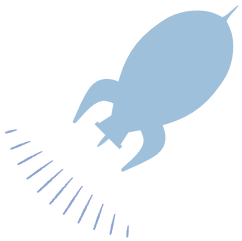
キャサリンは数学者としての能力を認められた NASA（アメリカ航空宇宙局）の計算手。人種差別が色濃く残る 1960 年代、それも白人男性支配の強い NASA において、アフリカ系米国人である彼女と同僚のメアリー、ドロシーたちが残した知られざる功績を描いた映画が「ドリーム」だ。原題「Hidden Figures」。月面探査計画に繋がる有人宇宙飛行「マーキュリー計画」に尽力した、計算手と呼ばれる女性職員にスポットライトをあてている。

冷戦下の激烈な宇宙開発競争において、「アフリカ系米国人」の「女性」である3人の能力と地道な努力は、色濃くあった人種差別・性差別をもはねつけ、しなやかに壁を乗り越えていく。米国初の有人地球周回飛行という輝かしい業績を支えた「隠れたヒーロー」は、それぞれの夢を追い求める。個人の能力が認められ、結果として立場を手に入れキャリアアップしていく3人を通して、「人」という存在は、人種や差別を超えたところにあるのだということをあらためて知らしめてくれる作品だ。

三者三様のやり方で現状を打ち破る。それがとても清々しい。好戦的な手段を選ばずとも確かに勝利を手にした彼女たちの歩みはあざやかだ。冒頭の、エンストを起こした車を巡るやり取りがとても象徴的なものとなっているので、そちらにもぜひ注目をしてほしい。

当時はテクノロジーの脅威が人間に差し迫っていた時代。今と通ずるものがあるだろう。「問い方から考え未知の数式を編み出す。そうしなければ我々は地球から出られない」。上司の言葉に見事応えたキャサリンは、今年2月他界した。宇宙開発のみならず、世界に大きな貢献をした彼女の目にいまの社会はどう映っていただろう。

（鈴木　記）



男女共同参画社会を支える

地域における共同参画の重要性

男女共にあらゆる分野での活動機会を確保するという男女共同参画への活動を通じて常々思うのは、実は、こうして“取り組めること”自体の有り難さである。社会への関心や関心の持てる機会が何らかの理由で損なわれた場合に、いつの間にか自由な行動や表現も封じられる社会が出来てしまうのを世界のニュースが教えてくれている。

例えば、地域にはそれぞれ長く培われてきた文化・慣習があり、継承によって価値も増すだろうが、新しい考えも受け入れて積み重ねなければ若い世代や転入者の参画につながらず地域の継続自体が危うくなる。

転入者を含む新旧の住民やさまざまな世代の参画・協力は、意見の違いや時には誤解なども乗り越えながら地域の活性化や進展、多様性のあるまちづくりへの期待が高まる。一方、関わり合いを避け、互いに無関心となってしまえば、未来の過疎化への不安も生じる。若い世代が地域に留まらず、かつては素晴らしいとされていた地域が、長い年月の間に過疎地となってしまった例も多いのではないだろうか。

男女、年代にかかわらず、農業をやってみたい、山間地を開墾してそこで生活してみたい、という方々をテレビや新聞で見聞きすると、始めは“煩雑な都市を離れて自由に…”がきっかけでも、地域での創造的な共同参画による活動を通じ、特産物を生み出し、その地で働ける可能性をもたらすこともある。そして、新しい地域に定着した際には、“世代を超えた仲間をつくりたい”という思いや、被災時等には、“助けたい、助け合いたい”という共助につながっていく。

男女共同参画の推進は、固定的役割分担等にとらわれず多様性を発揮することであり、新しい文化の創造や経済の拡がりにも通じる活動だといわれるが、地域における共同参画を通じ、改めてその大切さを認識しているところである。

（前田 記）

コロナ禍後の 日常の暮らし方

新型コロナウイルスに関する報道は、季節が夏から秋へ移ろうとする今も一向に収まる気配がない。この半年間で日々の暮らしや、社会生活が大きく様変わりした。家族のあり方、働き方、学校教育のあり方、私たちの生き方等々。日々の生活様式にも従来の考え方を踏襲できなくなった。これからの時代にどう対処すればよいのかと考えてみた。

本紙『かがやけ地球』で、たびたび取り上げてきた男女共同参画が試みられ、実施実践される時代がようやく到来したのかもしれない。

■ ステイホームの体験が、家事、育児分担共同作業に。■

100 年以上前に定められた家父長制度により、日本の家族制度では、女の役割、男の役割が分担され、そのことが当然の暮らしになっていた。

家父長制度が廃止されてからも、その考え方は社会に根強く残っている。

それが今回のコロナ禍で、様々な角度から見つめ直す機会を得た。性別にとらわれず、共にできることをやり、補い合う生活を学んだ。

例えば共働き家庭では、育児が母親だけのものではなく、できる人が行わなければ、コロナ時代はしのげない。

このことは、家庭における格差をなくし、共に生きる生活、社会だと気づく。

■ テレワークが社会構図を変える。価値観の一転。■

在宅勤務に慣れただろうか。時間に縛られて動いていた働き方が一変。通勤時間がなくなり、他人を気遣うストレスもない。己一人だけの在宅勤務。スムーズに運用するには時間も経験も必要だろうが、適切に運用できれば、時間的余裕ができ、オンラインでの距離間で、対面勤務では見えなかったことを感じ、思いやりの感性が芽生えれば、共生の意義が増す。

■ 「共に生きる」ということ。■

近年、自分（個人）ファースト主義の人が増えたように感じていたが、これからは共生共存社会。共に暮らす、共存していく暮らしが当たり前の社会になっていくのではないだろうか。

これまで、男女共同参画の意味を、概念や理論で捉えてきた。コロナ禍において、自粛生活中、様々な問題に触れることができ、改めて、男女共同参画の意義深さを痛感し、学んだ。

（山口　記）

読書の秋に、多様性について考えてみる

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」（ブレイディみかこ著　新潮社刊）

2019 年、「本屋大賞」の「ノンフィクション本大賞」を受賞し、テレビの情報番組でも紹介されていた話題作。舞台はイギリス南部のブライトン。ちなみに鵠沼海岸は、ブライトンの海岸沿いに似ており、「日本のブライトン」と私は勝手に思っている。

余談はさておき、ここではアイルランド人の父と日本人の母（著者）をもつ「ぼく」が、市内でトップクラスの評判のよい公立小学校から元・底辺（と地元で言われている）中学校に入学してからの 1 年半を描いている。ティーンエイジャーに入る頃の「ぼく」が学校生活で感じたことを母との会話を織り交ぜながら話は進んでいく。移民への差別発言を繰り返す親友（本人も移民）にちょっとうんざりしていたとき「多様性はいいことなのに、どうして多様性があるとややこしくなるの？」と母に問いかける。「確かに多様性は物事をややこしくするし、衝突が絶えないけど無知を減らすにはいいことよ。」と答える母。

人種、国籍、性別（LGBT）、年齢、身体的特徴や障がいの有無…。多様性を挙げたらキリがない。「ぼく」の感じたことは「外国」での「特別」なことではなく、思春期の自分もこんなことを考えていたかな、いや大人になった今でも、日本でも感じることはあるはずだ。

「草むらにハイヒール――内から外への欲求」（小倉千加子著　いそっぷ社刊）

ステイホーム中、ネットサーフィンをしていたときに興味深い記事を見つけた。「毎晩お迎えに遅れてくるお母さんに保育士がたまりかねて『私にも子どもがいます！』と抗議した。現場は女と女の戦いです。」この人の本が読んでみたい、と思った。

著者がフェミニズム論壇の立役者と称されていることを知らなかった。この本は平成 20 年～26 年まで週刊誌に連載されたエッセイから再構成されている。中島梓（栗本薫）、佐野洋子などの著名人と母親との関係や上野千鶴子論に加え芸能、政治、犯罪、スクールカーストなどを軽妙に、時に辛辣に綴っている。

「子どもが家庭で過ごす権利」や「『育児の社会化』は本当に正しいのか」のタイトルで始まるエッセイでは、日本の長時間保育について言及している。著者は現在、こども園を運営しており、親（ここでは母親について述べている）の長時間労働によって、子どもが本来安らぐべき家庭で過ごせないことについても懸念している。

「『社会』は専業主婦を助けていない」といったタイトルで始まるエッセイでは、「子育て支援」の実態が「就労支援」になっていないか、子育てをしている専業主婦が置き去りになっている点はないだろうかと述べている。「フェミニズムの論客」の先入観からだろうか、私には意外に感じる一方、どこか嬉しくなったのは、専業主婦の経験者ゆえか。

（佐野　記）

編集後記

- 半年ぶりに子どもと映画館へ。一席空けての対策に感謝しつつも隣の席で観れる日が早くきてほしい。（佐野）
- IBM のマシンが瞬時に弾く計算を人間がしていたなんて・・・！検算を求められたキャサリンに驚嘆。（鈴木）
- オンライン診療で医療と通院も少し楽に・・顔色・表情・体の動きなど直接対面診療もやはり大切なようで。（前田）
- 連日猛暑の今夏、眠れぬ夜半に不安増す、コロナ渦。（山口）

インフォメーション

Public comment

パブリックコメントを実施します

◎実施する案件

（仮称）ふじさわジェンダー平等プラン2030（素案）

◎素案の閲覧

10月13日（火）から、人権男女共同平和課、市役所総合案内、市政情報コーナー、各市民センター・公民館で閲覧できます。

※市のホームページの「パブリックコメント」でもご覧になれます。

◎意見などを提出できる方

市内在住・在勤・在学の方、市内に事業所などを有する方、その他利害関係者

◎意見などの提出方法

10月13日（火）～11月11日（水）に素案をご覧になった上で、任意の用紙に必要事項を書いて、11月11日（水）（必着）までに、人権男女共同平和課へ郵送・ファクスまたは持参で。

※市のホームページの「パブリックコメント」からも提出できます。

※意見などは電話では受け付けません。また提出された意見などの原稿は返却しません。

◎意見などに関する考え方の公表

受け付けた意見などは類型化し、市の考え方を付して公表します。個別には回答しません。

レディオ湘南の新しいキャラクターに就任

レディオ湘南で以前パーソナリティを務めて頂いていたご縁で、イラストレーター/アートディレクターとして多彩な顔をもつ、安斎肇さんに書いて頂いたキャラクターです。

レディオ湘南 FM83.1 RADIO SHONAN 83.1FM FUJISAWA
www.radioshonan.co.jp
TEL:0466-25-7000 FAX:0466-25-7511

かがやけ地球は、市民の編集員さんの企画・運営によって、年４回発行しています。

編集スタッフ　鈴木　悠子・山口　千鶴子　前田　英孝・佐野　美穂子

ご意見・ご感想・今後扱って欲しいテーマなどをお待ちしております！

FAX　0466−50−8436

E-mail　fj-jinkendanjyo@city.fujisawa.lg.jp

藤沢の有隣堂《ご案内》 http://www.yurindo.co.jp/

藤沢店 0466-26-1411
JR・小田急江ノ島線「藤沢」駅南口直結「フジサワ名店ビル」2・3・4・5階

テラスモール湘南店 0466-38-2121
JR「辻堂」駅北口直結「テラスモール湘南」4階

藤沢本町トレアージュ白旗店 0466-50-7550
小田急江ノ島線「藤沢本町」駅から徒歩5分

●神奈川・東京・千葉に52店舗 ●学校・公共施設・法人への商品納入
●オフィス用品の通販 ●オフィス設計・家具 ●出版事業
●図書館・地区センターの運営 ●音楽教室 ●カルチャーセンター

有隣堂

Printing Communications
あなたの町の印刷屋
まずはお気軽にご相談ください

有限会社カワムラ印刷
Tel:0466-22-5431 〒251-0021 神奈川県藤沢市鵠沼神明 4-12-23

医療法人社団 藤順会
藤沢順天医院
神奈川県藤沢市鵠沼橋1-17-11
Tel 0466-23-3211

人間ドック　定期健康診断
脳ドック　婦人科検診

http://www.fujisawa-junten.or.jp

JR藤沢駅北口から徒歩4分

心配なこと、お困りのこと、ぜひご相談ください。

藤沢市藤沢581番地コムーネ湘南藤沢2F

相続　家族信託　裁判事務

司法書士　坂根事務所
TEL0466−25−4590
司法書士　坂根隆志
司法書士　堀　正晃

遺言　成年後見　借金問題

出張相談無料・土日対応（要予約）
http://www.sakanejimusyo.com

発行／2020年９月　藤沢市企画政策部人権男女共同平和課　〒251-8601 藤沢市朝日町１番地の１　TEL. 0466-50-3501
URL：http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/jinkendanjyo/　E-mail：fj-jinkendanjyo@city.fujisawa.lg.jp